

浄土

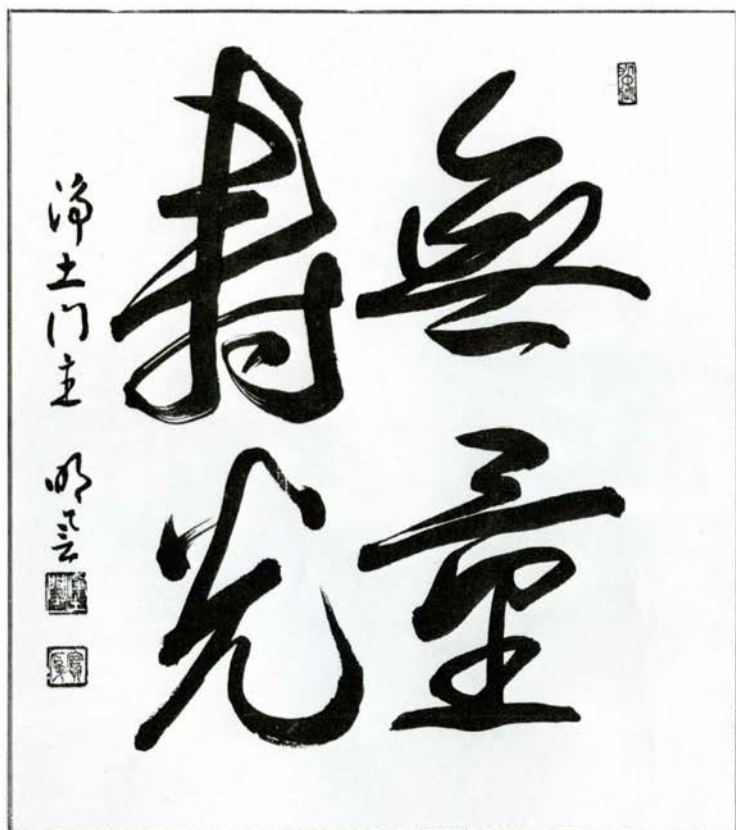
1983-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別取次郵便) 第三二五号
昭和五十七年十二月二十五日印刷 昭和五十八年一月一日発行
第四十九卷 正月号

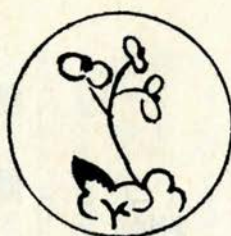


「無 量 光 寿」

浄土門主 藤 井 実 応



正月号



その衆奇妙にして道場超絶し、
国泥洹の如くにして等雙なから
ん。

——『無量寿経』歎仏頌

目次

——〈年頭随想〉——

「儲」の字に学ぶ

——あわせて「ウソ」について——……………藤井実応……(2)

〈年頭所感〉

俊乗房重源と阿波介……………稻岡覚順……(6)

——法然上人秘伝から——

前進座の「法然」を観る……………林 靈 法……(11)

Ⅱ俳句春秋Ⅱ

恩寵の余命傘寿や年迎ふ……………渡辺杜水……(16)

①②③④

ほとけ助け給えと願う心……………村瀬秀雄……(18)

亥年史談……………細田隆善……(22)

詩・・・初夢……………清川宗治……(28)

仏國行軍日記

正月の行事……………鷲見定信……(41)

浄土句集……………一田牛畝選……(20)

〈表紙裏・染筆〉無量光寿……………藤井実応

念仏ひじり三国志(104)——法然をめぐる人々……寺内大吉……(29)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

年頭随想

「儲」の字に学ぶ

—あわせて「ウソ」について—



浄土門主
総本山知恩院跡

藤井実応

岐阜県の養老の滝から一里半ばかりの農村の船附ふなつづに生れた私は少年の頃、京都のある呉服問屋もんや（いとう呉服店京都支店）にいわゆる「丁稚奉公」ちやうぢほうこう（商業見習い）になりました。そこでは

じめて人生のうらおもてなどいろいろ教えられました。毎日の日課は早朝の掃除（お店、庭等分担個所の清掃、廊下の雑布がけ）、煙草盆（きせる、たんつぽ付の）の清掃、便所掃除など。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

昼の間は番頭さんのいいつけで仕事、夜のひと時だけが自由時間であつた。台所には食時の作法―五観の一つ―と、火の用心が掲げられており、朝はお粥、昼、夕は麦の少し入った御飯がおいしく、時にはブリ(魚)のてり焼きなどあり、こんなおいしい御馳走は、はじめてとよろこんだりしたものである。暫くして「子供」として採用、月手当金卍円也を戴いた。その間特に「ウソ」ということを大いに考えさせられたことがあります。

ある時番頭さん(弥七どん―八木弥七氏)のお伴をしてお得意の間屋さん(丸紅商店)に参り、商売のあり方を見習つたのです。番頭さんは、私が大風呂敷に包んでそれを両肩に背負うて参つた、生縮緬のいくつかの見本を見せて、向うの番頭さんと取引をはじめました。「算盤」で値段をあらわし、「もつとまけときなはれ」「どうしてそんなにはできまへん」など幾度も「そろばん」をはじいては交渉。暫くして「そんなにまけては(ねだんを安くし

ては)赤字になります。帰って店長に叱られますが、この後も御願いせねばなりませんから、今回だけは、そう致しましょう」とパンパンと手を打って、売買が成立しました。その時丹後の生ちりめん百反が売れました。番頭さんの様子を見ていてほんとうに損をして売られ、店長さんから叱られるのでないかと心配になって、帰途、「ずいぶん損をしたのですか」とたずねると、番頭さんの曰く、「バカいえ、あれでとても儲かつたのだ」とニコニコして申しました。これが商売のコツだということです。私は啞然! あいた口がふさがらぬばかりでした。

商売するにはあのように上手にウソをつかねばならぬのか、自分にはどうもあんな大ウソはつけそうもない、小学生のときウソをついて父からさんざん叱られたことあり、小学校でもウソをつくな正直であれと修身で教えられたことが思い出される、他人を瞞すこと自体とてもいやで仕方がない、商人には向か

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ない性格らしい、ということ、その時はつきりと知りました。第一、ウソをついてまで儲けようとするその性根が気に入らない、俗世間というものはこんなにも汚いものか、という若者らしい正義感、潔癖性みたいな感情が先に立って商人に失望を抱くようになり、それが一つの転機となって出家への憧れを抱き始めたのは事実で、出家の動機にはまだ他の事情もありますが、今は略させて頂きます。そこで右のお話に関連して、先日『浄土宗新聞』の宝田正道上人（浄土宗出版室長）と対話した時聞いた話が、私にはおもしろかったので、ここに受け売りをさせていただくことにします。それは「儲」という漢字についての話であります。

宝田室長のお考えによりますと、「儲」という字は、人ベンに諸と書く形をしています。つまり「諸人」、多くの人々という意味であります。ところがもう一度よく眺めてみると、これは「信」と「者」の合成字、つまり「信

者」とも読みとれます。「諸人」と「信者」が一体となって「儲」という字は成り立っているといってもいいのであります。

すなわち、儲けようとしたならば、ウソや駆け引ではなく誠意によって多くの信者にす。客の信用を得るのが正しいやり方であることを、はからずもこの字が示しているのではないかと聞きました。

近代の商取引について百貨店など正札つきで、それより値引きなどいたしません。そして二割なら二割儲けていると、正直に商売ができるようになった。安く仕入れて高く売るのが、商売のこつではあるが、仕入先も儲けてもらわねばならぬ、共生きの精神で共に栄えゆくのだから、ウソをつかないで商売できるようになったと、ある商人からも聞きました。全くその通りだと思えます。

宝田先生のいわれるように、諸人を信者にすればお客はひとりでに集り、儲けはウソや駆け引きなどしなくても自然に積み重なって、

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

いつのまにか「信用」という大きな財産を築いていくわけであります。古いのれんを誇る老舗の繁栄は、偏に永い間にできた信用のおかげといふことができるでしょう。「信用」は大きな財産であり、また大きな資本である、といえます。

ところで、せっかく先祖や先人が粒々辛苦額に汁して築き上げた信用も崩れる時は早いものです。一攫千金を夢みて濡れ手に粟のボロ儲けを図ろうなどと企み、誠実を失った商売をする信用はたちまちなくなります。ニセのギリシヤ秘宝を並べて客を釣ろうとした某百貨店の例でも分るとおり、どんな老舗でも、ちょっとした心のゆるみが原因で、お客にウソを押し売りして儲けようとしたため、儲けはおろか信用まで一挙に失墜してしまうのです。世にウソほど恐ろしく忌わしいものはありません。

ニセ秘宝、ニセ札、ニセ写真など、マスコミを販わすウソの種は尽きませんが、人間の

中にもこの程はニセ者が沢山平気で横行しております。ニセ医者、ニセ博士、ニセ坊主、ニセ警官その他、外形で中身をかくして人を瞞し、本物を装う人間たちですが、化の皮はすぐ剥がれるもの、ウソつきや似而非者の栄えたためしはありません。照顧脚下、自らはニセ者ではないかと内省、共に、ほんとうのことを知り、ほん者になりたいものです。

もともと生れながらにして煩惱具足の凡夫にすぎない私どもです。どんなに智慧をしほっても、偽りの盛装をこらして力んでみたところで、所詮、み仏さまから見れば、はかなく小さい者にすぎません。ありのままの罪深い人間なればこそ、善人は善人ながら、悪人は悪人ながら救って下さるのです。この平等一子の大きな慈心を信ずる限り、無理をしてウソをついたり、ニセ者にバケたりすることはないでしょう。「疑いは人間にあり、天にいつわりなきものを」という謡曲『羽衣』の一句、心して鑑賞したいものと思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

年 頭 所 感

俊乗房重源と阿波介

——法然上人秘伝から——

大本山金戒光明寺法主
稲 いな 岡 おか 覚 かく 順 じゅん

とある。

真偽の程は不詳であるが、この伝には伝歴的部分より説話的部分が多く、特に俊乗房重源と阿波介とのかかわり合い、禅勝房の悲恋物語等を始め、皇円、明遍等の法

法然上人秘伝三卷（浄土宗全書十七）は隆寛選とあり、この伝の末尾には、

「上人御在生の時、つれづれに誌しおき給える御筆を隆寛に相伝された」

然上人をめぐる重要な人々に関した説話が、興味本位に記述されて面白い。

他の諸伝には余り見られない史実を離れた(筆者の寡聞によるものか)秘事の秘とも思われる部分が多いから、今はこの中から俊乗房重源と阿波介とのかかり合いの部分拾い出して見る。

一 重源の略伝

俊乗房重源の姓氏は不詳、保安二年(一一二二)京都で生れ、長承二年(一一三三)十三歳で醍醐寺で出家、その後四国に渡って修行、大峯、熊野、御嶽、葛城の諸山で如法經書写や読誦を行い、又高野山に登り修験の実感をえた。

仁安二年(一一六七)入宋、翌年明州で榮西と会い、ともに天台山に登り同年帰国した。この時浄土五祖像や五劫思惟阿弥陀像を将来した。

治承四年(一一八〇)東大寺が焼失、半年後東大寺造営勸進職を命ぜられ(六十一歳)、着工三年にして大仏鑄造は完成、翌年後白河法皇親臨で開眼供養を行う。次いで大

仏殿の造営に力を傾け、建久元年(一一九〇)その上棟を見た。

重源は半造りの大殿に観經曼陀羅と浄土五祖像をかけ、法然上人を請じて法会を設けた。

建久六年(一一九五)には東大寺供養を行った。

大原談義が行われたのはこの間(文治二年秋のころ)のこととて、重源はその時門弟三十余人を率いて、上人側に参着したことは有名である。

建永元年(一二〇六)六月五日東大寺で示寂、八十六歳であった。

法然上人との出会いや、念仏信仰体得の経過は詳びらかでないが、御伝によれば、上の醍醐の禅徒で、真言の芸修深く、「大方よろずにはかりごと賢き人」とたたえられた逸材で、法然上人の信望のことの外篤かった人である。

二 勸進職を引き請けるまでの経過

焼失した東大寺再建を後白河法皇は発願したが、勸進職の選定は容易でなかった。その候補の第一人者として

法然上人に白羽の矢がたった。

折柄上人は、日課六万遍の別時念仏中であったので辞退した。

然らば門弟中から器量の人を推挙せよ、との重ねての厳命である。

二度の宣旨を断ることはばかり多い。

そこで上人は弟子中の器量人として重源を考えられた。

折しも重源は奥州藤原秀衡の許に旅行していた。

上人は重源の不在を知って当惑した。

ところが重源はその夜の夢告でこの事を知った。自分不在のため師匠に累を及ぼすことを恐れた重源は、その曉方、館を発ち、四十余日の旅程を僅か三日三晩で上人の庵に到着した。

上人は喜び、早速この旨を宮中に報告した。

重源も二つ返事で勸進職を引き請けた。

三 阿弥陀の護符の頒布

大責任を負った重源の第一の仕事は、募財のことであ

る。

先づ全国に自分の弟子六十人を派遣して勸募の事に当らせると共に、自分は坊に留まり秘策をねる傍ら、洛中の貴賤僧俗をくまなく勸進した。その中には後白河法皇、皇嘉門院、九条兼実等の貴人も含まれていた。

その頃宋から来日していた鑄師陳和卿に、大仏鑄造の援助をとりつけたのも成果の一つであった。

大殿造営を請負う大工の選定も一苦勞であったが、重源独得の炯眼によって良匠の配置に成功した。

重源は一つには勸募の実を挙げるため、一つには念仏弘通の方便として、変った秘策を練った。

人々は浮世の榮華の夢に酔い、後生のつとめを忘れているが、一度命終り地獄の閻魔大王の前に引きすえられた場合はどうなるか。

「お前は娑婆で名前は何と言った」と問われた場合、「阿弥陀の三字を唱えたならば、三惡道の罪を逃れるに違いない」と考えた重源は、法華經の文字数、六万九千三百八十四文字の一字づつを頭文字として、その下に阿弥陀の三字を書いた護符を作り、これを幾内の道俗に頒布した。

奇策は図に当った。人々は雲霞の如く集まり、争う様にこの札を買い求めた。

器量抜群の重源の面目躍如たるものがある。

四 阿波介の登場

この阿弥陀の護符頒布に際して、図らずも阿波介が登場するのである。

ここで阿波介の素性を一瞥すると、勅修御伝には、

「阿波介という陰陽師、上人に給仕して念仏した」

とあり、きわめて性愚鈍の者であるが、この愚鈍の阿波介こそは、浄土宗の二連念珠の創始者であるといわれている。

彼は百八の念珠を二連持つて念仏していた。

側の人がその訳を尋ねたところ、「芽子（数珠についている数とり用の記子）をたえず上下すれば、その緒がつかれやすい。一連で念仏し一連で数をとれば緒が長持する」という。

あとで上人はこの事をお聞きになって、「誰でも往生の一大事となると、思いもよらぬ才覚が出るものだ」と

感心されたという。

この阿波介の創意が生かされて、現在の浄土宗の二連念珠となったのである。

この阿波介について、秘伝では次の様に述べている。彼は放逸邪見の男で、人が左と言えば右と言ひ、右と言えば左と言ひ、人の心をたぶらかすことを得意としていた。

金持の長男で、家には七珍万宝を貯えていた。七人の妻女をもっていた。この七人の妻女を日に三度まで裸にして、七本の柱にしばりつけ、片はしから杖で打ちすてて、女の泣き叫ぶ声を肴に酒を飲むという、酒池肉林そのままの嗜虐主義者であった。

折柄、俊乗房重源が東大寺勅進職を引き請けた頃であった。

重源が阿弥陀の護符を売り出した話をきき、食欲の阿波介の本性をあらわした。

即ち七日間衣服を替えたり、代人を出したりしながら七枚の札を手に入れた。

ところが八日目の朝、この札を出して見たところ、なんと七枚の札が笹の葉に変わっていた。

正に天罪觀面というべきである。

この貪欲邪見の阿波介が仏心が芽ばえた動機についても、秘伝の記述は面白い。

伏見に住んでいた彼は、ある時播磨の国の「うらく」に行く途中路に迷った。一日の行程が三日もかかった。この時彼が思ったことは——、「旅をするにも道案内が必要だ。まして浄土への道もよい善知識がなくてはならない」と。

そこでよい善知識を求めて後生を願いたいと考え、熊谷入道に手引してもらい、法然上人に見参することが出来た。

熊谷入道はかねてから阿波介の性格を知ってたから、「この男出家するにも一筋縄では駄目だ」と見抜いていた。

そこで熊谷はいきなり阿波介のうしろに廻り、房々たる黒髪を押切ってしまった。

こんな機縁で阿波介は上人から剃度をうけ仏門に入り、上人から七日間に渡った念仏の法門をきき、ついに道心をつかむに至った。

阿波介思うよう、「折角つかんだ道心だが、この假家

に帰ったなら、再びもとの木阿弥になりかねない」と。

そこで家に残した財産を七等分して七人の妻女に譲るところとし、形見を伏見につかわし、自分は上人の庵室から籠を肩にかけ、一目散に奥州に下り、藤原秀衡の建てた光り堂の椽にたどりつき、端座合掌、念仏百遍を唱えて往生をとげた。

近隣の人々が集まり葬送をしたが、屍体の骨は水晶のように光り輝いていたと言う。

秘伝の記述は右で終っているが、勅修御伝には、ある時法然上人が聖光房に對して、「阿波介の申す念仏と、源空の申す念仏とどちらが勝る」とのことでの問答があった事が語られている。

これは、阿波介の如き愚鈍の輩の申す念仏も、法然上人の申す念仏も、如来大悲の前には勝劣がない、との上人の信念のほどばしりであるが、この様に阿波介が一文不知の愚鈍の身を代表する如き表現は、阿波介にとつては少々気の毒とも感じられないでもないが、さてどうであらうか。

前進座の「法然」を観る

大本山百万遍知恩寺法主

林 はやし

霊 れい

法 ほう

いま前進座の「法然」が上演中である。昨年八月から九月にかけて、京都と東京で上演され、本年は二月が大坂、三月が名古屋で夫々二十日間づつ上演され、それから北は北海道から南は鹿児島まで、全国の主な都市全域にわたって上演がつづけられ、その上演回数は約二百回

にのぼる予定である。そして、この上演の観客は約二十万人にのぼる。

私は最初この「法然」が上演されるときかさねたとき、本当に驚いた。法然上人を上演せんとする劇は、先ず成功は出来ないということである。それは法然上人の

宗教的な人格が余りに大きいからである。

ある会合で、それは文学者や思想家などの集りであったが、そのとき、日蓮上人や親鸞聖人は、小説や劇には書きやすく、まことに都合がよい、ところが、法然上人はどうも小説としても劇としても、やまがないので書きにくい、それはいまの浄土宗のお坊さんが一般にまるいというのも、祖師の法然さんの風格から来ているのだらう、このようなことを言われた。たしかに、法然上人の場合は、日蓮や親鸞の場合のように個人としての行動の起伏が目立たぬところがあるからでもあろうか。浄土宗のお坊さんが他宗にくらべてまるいのは法然さんから来ていると言われるのには、どうも私は納得出来なかった。

これまで法然という宗教的人格を正面きって描いた小説は、佐藤春夫さんや三井晶史さん位を除いて余りなかったし、劇というものはまとまったものとしては殆どなかった。しかしそれは法然上人の場合、その行動に現代人にとって興味ある起伏がなかったということではあるまい。実を言えば、とても興味ある重要な事件がいくつもあるのである。父親時國の死、母親と生き別れ、十八

歳の黒谷隠遁、二十四歳釈迦堂参籠、四十三歳の黒谷報恩蔵裡での回心、そして、晩年における旧教団よりの弾圧迫害、住蓮、安楽の活動と鈴虫松虫の出家、そして弟子たちの断罪、やがて四国下向にあたりての師弟の別離、そして瀬戸の海での遊女の教化等、実に劇作家として描きたい場が沢山にある。そして、これらの事件の背景に乱世という大きな歴史的背景がある。法然上人の念仏の生まれて来た背景として、何としても源平争乱の十年にわたる乱世の末法の相貌があることである。死ぬることが必然であって、生きのこることがまことに偶然としか受けとられぬ時代であって、生きる希望も努力も打ち砕かれて、なるようになれという悲しい絶望の時代に向かつて、浄土に生きるという大きな炬火を人間のゆく手に点ぜられ、希望の浄土に生きることによって、浄土からの見かえされた只今の生に、これまでとはちがった生きることへの希望と勇氣とを与えて行ったのが、法然上人の念仏であった。現実の武士の世界は敵味方殺し合いの世界であった。法然上人の念仏はこの源平争乱の武士の戦いの世界を否定して、恩讐もろともに救われていく共生浄土の大きな世界を生み出して行ったのである。

あの悲風蕭々たる時代を、もろともに救いとして行ったのである。

x

x

この大きな法然上人の宗教的人格を描くこと、或は上演することは中々出来るものではあるまい。先ず法然上人の周辺を考えてみる。師の法然上人の念仏のころを本当に受けとった十人ほどのお弟子がいる。そのまわりに日本各地より吉水の草庵に訪れる、各地より多数のいわゆる念仏上人がいる。その念仏上人たちは、夫々各地にあって自分の念仏の信者をその周囲に多数に擁している。ともかく、法然からは直接信未信の信者に直接語りかけていられたが、専修念仏の集団というものは、このようにいく重にも師の法然上人をさまざまな立場の念仏者がとりまいていたのであり、その頂点に立って、教化者としての指導をせられていたのである。その念仏の統率者としての姿は、実に実に大きなものであった。だから、法然上人を真正面から描こうとすれば、富士山のはばひろい大きな麓からして、漸々に頂上に迫って描き出さねばならぬ。

このことは並大抵なことではあるものであろう。いや不可能に属することであらう。私はこれまで日蓮上人や親鸞聖人の小説や劇を拝見しながら、このように思いつけて来たのである。ところが、今度「法然」を前進座が上演されるというのである。これまで「天平の薨」や「親鸞」の上演を見て、その成功をよろこんだが、今度はどうなることか、と先ず法然上人の念仏のころをこわされることにならうかと、ありていに言って先ず不安が先きに出たのである。それに、中村梅之助さんが法然を演じられるというのである。「遠山の金さん」が法然上人となるのかと、先ず私の印象はこれはどうなるかと思った。私はテレビで余暇があれば、ときどき時代ものを見る。「水戸黄門」、「銭形平次」、「右門捕物帳」などである。筋がきは解していても、人情と正義とに訴えられたもので気持ちがいのである。いつも頭を使っている私には、頭を使わずにまことにいっぶくの清涼剤となっている。ところが、今度はちがう、遠山の金さんが、一体どこまで法然さんになり切れるかということであった。

x

x

ところが、私のこの考えがまちがっていたのである。

前進座はその上演に先立って、全員の方々がすでに法然上人についていろいろと研究調査をせられていた。そして、昨年二月には百山において前進座の会員が一日研修会をもたれた。高橋良和先生が法然上人のご遺跡について話をされたが、私は法然上人についてのイメージを二時間ばかりお話し、田島栄さんの原作（これは始め百山において書かれ、後数回にわたって書きかえられた）についても、私の読後感と希望とをお伝えした。ところが、私のお話を申上げている間、中村梅之助さんは、全員の一番前で、ただひとり座ぶとんも敷かず、洋服のままで、私のすぐ前に正座のままで最後まで聴き通せられた。私はそのすがたを拝見いたし、私が遠山の金さんなどという先入観をもって考えていたことの全くまちがっていたことを知らされた。実にその真剣な姿勢にこころ打たれながら、前進座の皆さんにお話をつづけていた。

私どものお話を終ってから、更に中村さんと原作者の田島さんとが私の部屋に來られて、二時間近い間話し合いをいたした。中村さんが以前より中々に仏教を研究せられていること、その真摯な研究的姿勢に私は大変に胸

をうたれて、俳優というものの芸や生活のきびしさにひどく感心していた。

中村さんの質問の中の一つ、それは印象深いものであったが、法然上人のようなあんな大学者で、おえらい宗教家が、南無阿弥陀仏のただ六字のお名号をいただかれるのに四十三年もおかかりになったことについて、私にはまだ十分にはわかりかねております、という言葉であった。

私は最後に中村さんに、「今度の『法然』上演にあたって、そうです、中村さん、あなたが一番にご功德を受けるのではありませんか」と、申しあげていた。

x

x

私は八月に京都の南座における最初の上演にあたって、ありていに申して、多少の不安をもって観せてもらったのである。しかし、幕がすすむにつれて、私の不安は漸くに消えて行った。そして、最後に法然上人が四国に旅立たれるところで、お別れの言葉と共に、弟子たちと「一枚起請文」をよまれることとなって終幕するのだが、その時分には私の目がしらは熱くなって涙がこぼれ

そうになっていた。観ている方々はいずれもすすり泣いていた。

よかったと私はころでうなずいていた。あの実に多数のお弟子やご信者を擁して、さまざまな色合いのある大勢の人々の頂点に立たれている法然上人、そして市井の名もない老若男女といつても膝を交えてお話し合いをせられつつ生きる命として念仏をひろめて行かれる姿が非常によく現われていた。法然上人という方は、人を信頼し切っている方である。悲しめる人、罪の人に接すると、直ちに文句なしに、その悲しみや淋しさを自分のものとして受けとって、共に悲しみ悩んで行く方である。

直ちに相手と一つになって生きて行かれたのである。曾我量深先生が法然上人の生き方は即自態だが、親鸞聖人のそれは対自態であると言われた。むつかしい表現だが、そのお人柄を、またその教学や信仰を悲しみに同じて共に念仏に救われていくのである。だから法然上人の場合は第十八願の一願建立である。親鸞聖人は第十八願そのものの法然上人を向うにおいて、その背景に第十七願の世界を思弁的に見ねばすまぬ方である。五願建立はこの哲学的な姿勢から生まれた。

ともかく、こうした相手と共に悲しみ、共に救われて行こうとせられた大きな法然の宗教的人格が「法然」劇にはよく現われてうれしかった。

それにしても、京都上演中にすでにご尊父の畚右衛門さんがご病気で助からぬことを、中村さん自身は知りながらの上演であった。やがて東京上演中であつたが、ご尊父はなくなっている。さすがに、中村さんは俳優として、ご自分の悲しみを心に包んでの舞台であつた。そのときの心境について、中村さんは語っていられる。あたかも法然上人が最晩年においてお弟子の信空にのこされた言葉、「たとえ師弟とを遠くへだつとも、やがて浄土での再会近きにあるべし」と仰せられ、また「南無阿弥仏陀をとのうれば、いつでもどこでも、そこに法然は生きている」というお言葉であつた。この法然上人のお言葉が自分の胸の中に深く深くいだかれていた、と中村さんは増上寺での布教師大会の席上で申されていた。

百山でお会ひした席で、今度の上演で一番にご功德を受けられますのはあなたですよ、と申上げていたのは、このことであつたのであろう。

俳句春秋

恩寵の余命傘寿や年迎ふ

西山浄土宗深草派
大本山円福寺法主

わた なべ と すい
渡 辺 杜 水

八十の加餐すこやか初硯

報恩の二字を楷書の試筆かな

生死無常独去独来去年今年

新日記書き了せばやとぞ思ふ

芽ぶく樹や地動信ずること難し

鐘が鳴り双盤打ちて果つる御忌

遣教の一句掲げて涅槃寺

生けるもの五十二類の哭く涅槃

群萌の嘆き涅槃は死にあらず

涅槃忌の奉加や釈迦の灰といい

山門の前春泥や下乗石

花吹雪あびて知足の人生観

揚雲雀わがゆく道はまっすぐに

右脇より生まれしという甘茶仏

七歩すという童顔の裸仏

大樟の下菩提樹の花垂るる

暮遅きこの日再び来たらざる

夏安居の老能化たり坐して説く

一瞬の生あり死あり蠅叩

露しとど南無石仏の声を聴く

秋晴や六根清浄どっこいしょ

枕持たず歩くならひや秋晴るる

お骨なき兵の大きな墓洗ふ

みづからの終ひの日思ふ展墓かな

短日の刻を惜しみて老ひ忘る

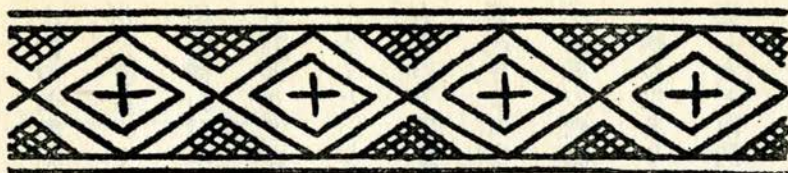
湯豆腐や命いたわる話のみ

真仮あり虚実もありて虎落笛

寒の水一病息災胃にそそぐ

僧事あり俗事もありて年用意

足るを知り足らざるも知る十二月



(一) (口) (法) (話)

心願とえ給け助け

お 雄 秀 ひで せ 瀬 村 むら

法然上人はわが国に伝来していた經典や註釈、高僧の伝記等で目を通さなかったものは一つもなかったし、しかもそれらの本義を究めていた。こうして上人が各宗の教義に精通しているという評判が次第に高くなり、広く人々の口にのぼるようになった。法相宗や三論宗の高徳の僧たちは上人が正しく教義を解釈していることに感歎し、天台宗や華嚴宗の勝れた学僧たちは口々に上人の幅広い学識を称賛していた。ところが上人は、

「戒定慧三学の外にわが心に相応した法門があるというのであろうか。わが身に堪え得る修行がどこにあるのであろうか。多くの学僧に教えを乞い、あらゆる修行者を訪ねてみたが、教えてくれる者もなく、修行を示してくれる人もなかった」

と述懐している。これは、上人を教え導くだけの徳僧や学僧がいなかったのと同時に、上人の求めている法門が従来の宗門の中にはなかったことを嘆いた言葉である。そして上人はひとり経蔵に入って、善導大師の觀經疏の中から念仏の法門という易行道を見出した。これは知恵のあるなしや持戒破戒の区別なく、誰れでもがたやすく救われるという破天荒な教えであった。阿弥陀仏の慈悲

とお力を信じて念仏を唱えれば、素質や能力に関係なく誰でも救われるという教えであった。しかし上人は常に仰せられていた。

「必ず極楽往生ができる」と信じて念仏を唱えている者は往生できる。往生できるかどうか判らないと思ひながら念仏を唱えている者は往生できない」

生死や罪惡に沈んでいる者が自分の力で極楽往生できるわけがないのであるが、阿弥陀仏のお力と導きによって初めて救われるのである。仏の本願成就を信じない者が往生できるわけがないのは当然である。また上人は次のようにも仰せられている。

「南無阿弥陀仏という六字の名号に特別な意味があると思つてはならない。念仏とは阿弥陀さま私を助けて下さいという言葉であると心得た上で、心に阿弥陀さま助けて下さいと願ひながら口に南無阿弥陀仏と唱えれば、それで三心が具足されている念仏というのである」

念仏は阿弥陀さまお助け下さいと真心から願ひながら唱える行である。ある時上人は二祖の聖光房弁長に向つて、雑用をしていた阿波介を指さしながら仰せられた。

「あの阿波介も仏たすけ給えと思つて南無阿弥陀仏と唱

えているのである。源空も仏たすけ給えと思つて南無阿弥陀仏と唱えているだけである。阿波介が唱えている念仏と、源空が唱えている念仏とは少しも差別がないのである」

後になつて聖光房弁長はその時のことを思い出して、次のように語つた。

「浄土宗の肝要なことを改めて教えられたように思つて、尊いお言葉に感涙を催したのであつた」

つまり仏たすけ給えと思つて南無阿弥陀仏と唱えることが浄土宗の肝要であると教えられて、涙を流す程に感銘を深くしたのであつた。

善導大師は南無とは帰命するという意味であつて、往生せしめ給えと願う言葉であるから心願であり、阿弥陀仏と唱えることは身行であると説く。そして南無阿弥陀仏と唱えれば心願と身行とが兼ね具つて混融し、極楽往生ができるのであるという。このように大師の教えにおいても、念仏とは、ほとけ助け給えと願つて南無阿弥陀仏と唱えることであるという。要するに念仏には、ほとけ助け給えと願う心こそ大切なのである。

浄土句集

一田牛畝選



評 新米も届けられた。祝いの酒も配達され親類縁者も集り揃った。芽出度い唄も出て来た。嚙ぞ賑やかなことならん。

福岡 行正一如子
隠居して静かに秋を楽しめる

東京 新井 新生
お念仏唱へ落ちつく秋彼岸

福岡 前田 秀峰
極楽もかくやあるらん花の寺

評 年取れば自分のことばかりでなく他人のことで用事が多くなり忙しい日ばかりとなつて落ちつかないのであるが、お念仏を唱えれば遂に落ちつくのである。それが秋彼岸ともなれば殊にそう感ずるのである。

評 桜が咲き乱れている。みな桜見に集つて御馳走を拵け酒をかたむけて愉快そうである。極楽もかくの如く楽しからん。

東京 田中 秀代
嵐さり富士爽かにそびえけり

山形 松田 允子
度のあわぬ夫の眼鏡や長き夜

山梨 青山富貴江
風仙花燃えてはじけて旅終る

評 嵐が去った。富士山は清浄な空氣に取られ巻かれ爽かに聳えている。なんとなく気持ちがいいのである。

評 秋の夜は長く夜なべをするが、年寄りには老眼鏡をかける。夫のものでは度が合わぬ、もどかしいことである。

評 旅立つ時は風仙花の花盛りではあったが、戻った時は実となり、はじけて了つていて淋しさが殊更であった。

東京 満尾衣有子
新米も届き米寿を祝いけり

三重 森 静枝
古都めぐり心とどめし花菖蒲

福岡 原 敬二郎
秋寒やミケランジェロの石の棺

東京 真野よし子
朝市の色濃き茄子を買いにけり

山口 上野 明達
台風に墓参の人等足速に

福岡 行正 明弘
十夜諷誦受ける念仏が施主らしく

東京 吉原登起子
秋茄子の程よく漬る塩かげん

福岡 服部 光代
働ける事の偉大根播く

福岡 荒牧 還愚
新生姜さげて帰るも放生会

東京 末常てる子
秋扇いまだに旅に忘れまじ

福井 深井 鉦士
菊日和孫の怪我よりのがれたる

山形 松田 光誉
廃校はかくも静かに鵲鳴けり

東京 猪瀬 幸子
胸はって登校の子等赤い羽根

福岡 荒牧 亀齡
開発の進む駅前師走風

福岡 権藤みきを
露の身や卒^そ寿俄かに遊び給ふ

群馬 島津 か寿
賜はりし玉章供う秋彼岸

東京 細田 初枝
石路の花日溜りに笑む六地藏

京都 岩井 伏水
吾が余命紅葉の如く燃えゆかん

埼玉 佐藤 泰子
つくばいの水かえられし石路の花

福岡 安藤平二郎
秋夕焼山里はやき灯を揚ぐ

東京 小笠原香祥
松茸の乾きすぎたる香の薄し

長野 友淵旋風子
西空や寂びしさ加え月曇る

福岡 永江 隆説
夏休み登校日避けおてつぎに

東京 栗原やえ子
健善の葛切り孫と秋の京

福岡 上滝津弥音
新盆や笑みし遺影に語りたく

一田 牛畝
初春や美人揃いの孫の妻

亥年史談

—イノシシあれこれ—



葛城^{かつらぎ}のみ谷に眠る猪^{いのしし}の

いびきの上に鳴くほととぎす

子規

これは正岡子規の珍しい猪を詠じた短歌です。昭和五十八年は干支^{えと}の上から癸亥^{みづえ}の年であるので亥年^{いごど}、猪の年

ほそだりゅうぜん
細田隆善

(東京・深川勢至院住職
雅号・豊明)

といます。亥年生れの人の生涯の守り本尊は阿弥陀如来です。

亥年は古来、豊年の年、家計豊かな年、商売繁盛の年といわれてきましたが、今年の景気は日本も世界もいかがでしょうか。猪は、いのしし、いのこ、ししなどといい、多産系の動物であることから、稲作豊年の民俗信仰

と結びついたからです。

亥は、十二支では最後の十二番目、時刻では午後十時をいい、また午後九時から十一時までの二時間といっています。方角では北々西を表わします。



猪は、偶てい目、イノシシ科、アジアから欧州にかけて広く分布しています。高さ約七十センチ、体重は百キロ位、首が短かく、口先が長く、黒褐色の毛がたてがみ状に生えています。年をとると灰色の毛が交り、雄は牙が大きく出ています。猪の子を瓜坊うらぼうというのは、小さいときだけ白いたて線があつて瓜の形をしているからです。これは幼い命を守る保護色の役割をします。

猪は、夏から初冬にかけて枯場かばといつて枯葉の床に休み、四月から六月にかけてたくさんの子を産みます。雑食性の動物で鼠、蛇、みみず、稲、葦、芋などを食べ、一夜にして芋畑を荒すことがあります。猪は、五、六年で成長し、二、三十年の寿命です。

猪は、石器時代から好んで食用にしました。石器時代

の遺跡から猪の牙や骨が発見されています。上野の国立博物館に埴輪はにりんの猪が重要文化財に指定されています。これは群馬県佐波郡境町から出土し、完全な形をとどめています。また香川県から出土した弥生式銅鐸どうだくに、猪狩の素朴な絵が鑄造されていることは有名で、絵画史からも貴重な資料とされています。これは猪を矢で射止め、犬が取り囲んでいる図であります。



『古事記』に、景行天皇の王子、日本武尊が伊吹山いぶきで白い猪に出会った話があります。この猪は山の神の化身であるといわれています。

同書に大国主命おおくにぬしのみことと赤い猪の話があります。大国主命を殺そうとした兄弟たちは、山に赤い猪がいる、われわれが追い出すから麓にいて捕えてくれ、と頼み、大きな石を赤く焼いてころげ落しました。大国主命は、猪と思いい、これを取りおさえたため、大火傷をして気絶してしまいました。その母親が貝の薬を入手して大国主命を助けたという話です。

『古事記』と『日本書紀』に、雄略天皇が葛城山（奈良県）において猛猪を射止め、踏み殺しましたが、兵士たちは逃げ回った話があります。猪を素材とした最古の歌であります。

かすみしし我が大君の遊ばしし猪の病猪のうたき畏



み我が逃げ登りしあり尾の櫟の木の枝

（『古事記』）

このような和歌の源流を、記紀歌謡時代の歌といえます。

和氣清麻呂（承和十三年八八四六没）が勲名を奉じて、

天 支 利 摩

—東京・上野徳大寺—

九州宇佐八幡宮に参詣したとき、神使の猪三百頭が清麻呂を守護したといいます。このため清麻呂を祀る京都の護王神社の社前安置の狛犬は、猪の雌雄一対になっています。これがめ旧十円紙幣に、清麻呂の肖像と猪が描かれ、またその紙幣をイノシシといいました。

鎌倉時代、武士の遊興として、盛んに猪狩を行いました。これを巻狩、狩くら

ともいいます。源頼朝が建久三年（一一九三）五月、富士の裾野で猪狩をしたとき、仁田四郎忠常が、猪の背に乗りこれを手討ちにした話はよく知られています。このとき有名な曾我兄弟の仇討事がありました。



仏像の中で、薬師如来十二神将の宮毘羅大将是、亥の神将、頭上に猪を乗せています。赤色の忿怒相をして右手に太刀を持っています。

また、仏教の天部に摩利支天があります。摩利支は、インドのサンスクリット語の Marci からの音訳、威光、陽炎、太陽の光焰の意味、それを神格化して摩利支天といえます。摩利支天は、太陽の前を走り、天空を駆け巡り、護国護民を司り、戦争の難を救うとされ、仏教にとり入れられてから、仏教を守護、人々を救う天部となりました。古来、軍神、農神、隱身の神として祈られ、特に弓術の神、忍術の神として中古以来武士の信仰を集めてきました。また力士などにも信仰されてきました。摩利支天は天空をスピードで駆け巡ることから、猪

に譬えられ、猪に乗っている姿が多く見かけられます。特に三面六臂の像が多く、また天女形の女性像が多いのも特徴です。

江戸時代から、東京上野の徳大寺の摩利支天は有名です。国電御徒町駅のホームからよく見えます。

深川の摩利支天も江戸時代から有名でした。『江戸名所図会』に広大な境内が載っています。明治になって日先神社と称し、現在は江東区猿江の浄土宗重願寺の近くにあり、往昔の面影はありません。



江戸時代には、魚介類を多く食べ、肉類はあまり食べませんでした。しかし猪と鹿の肉だけは食べました。両国橋の東詰に、豊田屋、湊屋というももんじやがあって、ししの肉を販売して有名でした。現在でもそこにももんじやがあります。ししの肉は、鯨の肉に似ているところから、山鯨と称しました。山鯨という看板を出し、障子には牡丹と紅葉の画が描いてありました牡丹は唐獅子のししを表し、紅葉は鹿を表したものです。安藤広重

の「名所江戸百景」にも、んじやの山くじらの錦絵が名画の一つとして知られています。

○ ○ ○ ○ ○

芸者のことをシシといいます。文字では、猪では下品ですので、獅子と書きます。猪が夜行性の動物であって、一夜にして畑の芋を荒すことから、男性を食べることに通じ、芸者をシシということになったといひます。

一説には、江戸時代から山中温泉に由来し、湯女^{ゆな}のことをシシといひました。この湯女が客席にはべるのは十六歳であつたので、四四、十六からシシといひました。この湯女は温泉芸者のことでした。また一説では、猪は毛深く、その全体の姿が女性自身に似ていることから芸者をシシというようになったといひます。また猪の眼がハート型であることが、女性自身に似ているからだともいわれています。

本年の年賀用として売り出された四十円切手にしし乗、金太郎の郷土玩具の絵があります。これは仙台の土人形です。護王神社には紙と竹で作った猪狩の郷土玩具が

あります。東京の亀戸天神では猪に乗った大黒天の郷土玩具があり、京都伏見稻荷の参詣土産に千両猪があります。また広島県常石と福島県に張子^{はりこ}の猪、京都山崎には忠臣蔵定九郎の土焼の猪があります。

○ ○ ○ ○ ○

猪は、秋の俳句の季節になっています。

猪も共に吹かる野分^{のわき}かな

芭蕉

猪の寝に行く方が明^{あき}の月

去来

手負猪頭^{ておじず}突きて石を落しけり

爽

手負猪吠えつく犬を寄ろしめず

天慰子

田を植ゑて猪垣^ゆを結へり宇陀^{うだ}の峽

秋桜子

猪の見世物のあり天城山

豊明

猪や猪が田畑に入つて荒すのを防ぐ猪垣^{ししごま}は、竹や木の枝で作り、これも秋の俳句の季節になっています。

猪垣のとつぷり暮れし土瓶蒸^{どびんじ}

澄雄

猪垣の守る四五枚の峽田^{かふた}かな

翠舟

猪垣の崩れかけたる空青^{そうせい}し

徹

朽ち崩る孟宗竹や猪鬃^{とらで}

豊明

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八―二一八七

詩

詩

詩

初

夢

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

一年のはじめ――

今年一年のしあわせを祈る

すこやかな一年の生活を願う

家族そろって明かるく楽しく過ごせますように!!

望みや願いを初夢に乗せる

望みや願いを初夢に託す

富士のお山のような大きなお願いを

初夢の中にこめてみる

どうかこの望み、この願い、叶えられますように!!

小さい頃の初夢

今になって見る初夢

中味は変わっても

想いは同じ、ボクの初夢



念佛ひじり三国志

(百四)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



馬淵の里——

近江の馬淵は西方にスペースの豊かな台地を抱えこんでいた。ただし、この高地は湿地帯で農耕に適さない。自然水が湧くのか、水流の関係で溜まってしまうのか。いつもじめついている。

それらの水は台地下の池へそこまれ、逆に下方の谷間に人家があった。農耕地もひろがる。

台地上には曼茶羅堂が建っただけだった。平安初期の淳

和帝によって草創された、と伝えられる。

そのだっ広い曼茶羅堂の中央に住蓮は引き据えられた。すでに暮色がこの台地——西カ岡を深く包んでしまったが、さっきから誰一人現れ出ようともしない。縛しめの綱を握る小男の役人が控えているだけである。

やがて揉み烏帽子の雑人が現れて、一碗のコワ飯を置いていった。

手首を縛られたままの、不自由な夕食である。しかし、炊きたてとみえてコワ飯からは湯気がたち昇っていたし、混ぜこんだ栗の甘味が舌先をなごませた。左ノ獄では味わえないものだった。

夢中で食べていたので、その公卿がいつ立ったのか、住蓮は気づかなかつた。これまでずっと何処かで見張っていて、住蓮がコワ飯へ関心を集めたところで忍び寄ってきたのかもしれない。

公卿は僧形であつた。いや僧形の者に「公卿」という見分けがつくはずもないのだが、住蓮にははっきりと色別できた。

肌は薄化粧をほどこしているかと思ふがうほどに白い。まとつた法衣も山僧のそれではなかつた。錦つづれが小袖の一部に織りこまれていて、かえつて贅美をこらしている。優雅な眼もと、声は澄んだ金属音であつた。

「那智ノ検校によると、貴僧は亀菊どのとじかに会つて申し述べたいことがあるそうな」

貴僧——住蓮をいっばしの僧なみに呼びかけたあたりに、彼なりの礼を尽したつもりらしい。

「貴僧は、どなただったかな」

わざと訊いてやつた。すでに路上で牛車を暴走させていたこの貴族僧を見知っている。後鳥羽院の帷幕を牛耳る最勝四天王院の執行、尊長僧都である。日がな鎌倉武家政権の調伏を祈禱することを主務している。

「わしが誰でもかまわん。また、貴僧はわしらの前で亀菊どのとあらためて何かを申し述べる必要もない」

「……」

それはどういう意味なのか。

「貴僧の縛しめはじきに解かれるであろう。亀菊どのとも自由に会える。二人きり、水入らずでな」

「何でこの縛しめを解くのか」

「おぬしに罪はないからだ」

「わしの罪を許して、すべてをお上人、法然ご房にかぶせるつもりか」

「いや……法然は都からの追放だけで済むじやろう」

「死罪はなしか」

住蓮は、ごっくりと睡をのみこんだ。拷問に耐えた甲斐があつたというものか。みんなが洛外への追放だけで済んだとしたら、まだどこかの鄙で再会すればいい。

「それにしても法然ご房という人は、よほどの人望があるお方なんだな」

尊長の言葉づかいはあくまでも丁重であつた。

「人望ではない。仏菩薩の徳だ」

「あのご房のためなら、みんなが欣然と死地へ赴こうと

＜安樂・住蓮の念仏＞



する。いったい、どこでそんな徳は養われるのだろうか」

「僧都は未だお上人に会ったことがないのか」

僧都と呼ばれて尊長の眸が鋭く光った。相手は自分のことを知り尽しているな。でもすぐに柔らかさを取戻した。

「その機会を得ていない」

「ただお目にかかるだけでいい。一度お顔を拝し、言葉を耳にただだけで、たちまち心服したくなる。そういうお方だ」

「こわいようなお人だな。わしら煩惱で汚された俗僧は一度お目にかかったら、この眼がつぶれてしまう」

「……」

何が言いたいのか。

「み仏の肌を持っていらっしゃるわけか。そういうお方では、いつまでもこんな濁世におとどまり願うこと自体が冒瀆になる。一刻も早く往生の素懷を遂げて頂かねばならない」

「……」

やっぱり真意はそこにあったか。

「みずから阿弥陀一仏のお浄土へ往かれる範を示してもraithたいものだ。大相国あたりから、しきりと助命の嘆願が出ているが、それは情に溺れて本質を見誤まることなる。法然ご房の価値を安くする」

大相国とは太政大臣頼実のことだが、法然の助命工作はその妻卿二位兼子が動いているはずだった。

無駄だとは思ったが、住蓮は左ノ獄中でもくり返してきた門弟の不始末を強調した。今次一連の行動に禁制を侵犯するところがあるとしたら、師の法然には全く関係がなく、すべては門弟ひじりたちの責任である。

「それは、わかっておる」

尊長はおうようにうなずく。

「わかっておれば……」

「その面でもきびしく取締まる。坊門のお局と何やらごちやごちやあったひじり、安樂房と申したか。あの男の死罪は免かれない」

「遵西が死罪——」

「いかにも。また禁中へ押しかけてご政道の非を鳴らした西意房か。それも同罪となる。摂津あたりで淫楽にふけて金品を集めてきた性願房も処刑されるであらう」

「西意も性願もか」

「だからと申して法然ご房の罪が軽くなったことにはならない」

「それでなお尊長どの」

住蓮は居直るしかないと思った。

「何じゃな」

「このわし、住蓮の首は剝ねぬのか」

「さ、そこだ」

「何が……」

「おぬしの首も、いやさ法然ご房のお命も、おぬしの決断一つでできる」

「わしが何を決断するのか」

「わたしにはわからない。それが何であるか」

尊長はするりと身をかわしてしまった。

「誰が知っているのだ」

「判官だ。佐々木判官に訊いてみるがいい」

判官とは――

佐々木弥太郎高重のことだった。

かねて住蓮が、その一族で念仏ひじりとなった佐々木四郎高綱に、動静を探ぐってもらっていた相手である。

鎌倉に背を向け、同族を割って、後鳥羽院を支える「近畿武士団」の中核を占める存在だった。

「その判官が？」

住蓮は尊長の返事待った。

「判官が提示する条件を呑んで、実践するかどうかによって貴僧は罪を許されもすると、罪人ともなる」

「師のお上人はどうなるのか」

「さあ……あとは判官どのの胸一つだな」

いかにも思わせぶりである。それだけに、これから提示してくる条件は重要であった。

住蓮の全身は新しい緊張でこわばった。ここは全知全能を傾けねばなるまい。ただの風紀事件に絞り上げて師の法然を助けようとする考え、それはいささか甘かったかもしれない。

このあと尊長は巧みな誘導の技術を駆使して、鎌倉の内部情況やその武士団の人脈を根掘り葉掘り聞いてきた。住蓮はのりくらりと無難な答えだけを返した。

もう深夜だった。

俄かに曼荼羅堂の前庭が騒々しくなった。馬はいなき、荒っぽい男たちの怒号が飛び交うた。そして、床を踏み鳴して十名近い武者たちが堂内へはいってきた。

みんな鎧姿だった。なかに一人だけ狩装束に烏帽子という軽装の男がいる。尊長僧都のかたわらへきて、武者が差し出した床机へゆったりと腰をおろした。

「弥太郎判官どの」

尊長は呼びかけとも、また住蓮に教えるともなく曖昧に言った。佐々木弥太郎高重だ。

「いや、おそくなった。何せ岡の下には甘縄神明がある。迂回せねばならぬ。社人どもがうるさくからんでくるのでう」

近江の大半は佐々木領だった。だが以前から延暦寺の衆徒に支援された神社との争いが各地で絶えなかった。

この馬淵でも甘縄神明社はその争点となっている。一度召し上げられたものを平清盛が接収し、延暦寺へ寄進してしまった。現在は「山の僧都」となった尊長の支配下になった。

佐々木の名を聞くと、いきりたつ神人たちがいたよう

である。

「このひじりだな四郎冠者と親しくしている男とは？」
弥太郎高重は住蓮を覗きこみながら、一族のライバル佐々木四郎高綱のことにふれた。

「亀菊どのとも、わりない仲だと申しておる」

尊長が言葉やさしはさむ。

「いい度胸だ。ひじりの身で院の寵姫を寝盗るとはのう」

髭の下で好色な笑みをきざんだ。

「出まかせを申しているにちがいないが」

と、尊長は弥太郎判官をうかがった。

「うむ。出まかせかどうかは、じきに判明するわい」

「来ているのか、亀菊どののは」

「うむ。呼んでまいれ」

と郎党の一人を眼でうながした。

その郎党が曼荼羅堂を立ち去ったあたりから住蓮の胸は緊張でしめつけられた。あの美少女と再会できるのだ。しかし、その再会がすべてに終止符を打ってしまうことになるであらう。

相変らず美少女は男装だった。烏帽子こそかぶらず黒

髪を白帯でたばねただけだったが、細い身体に密着した物具や腿立ちの袴、手甲脚絆は誰が見ても凛々しい若武者であった。

「この者を見知っておられるか」

住蓮の眼前に立った亀菊へ弥太郎判官は訊問口調でた
だした。

「……」

一瞬なつかしげな視線が、住蓮の顔を撫でまわした。

でもすぐにそれは凍結した。

「どこのお方でしょうか」

「見知らぬとな」

「初めてお会いするひじりです」

尊長僧都がわが意を得たと言いたげな皮肉な視線を刺
してくる。

「おい、貴僧のことは全くご存知ないそうな」

「そんなはずはない！」

住蓮は絶叫せんばかりになった。

「亀菊どの、お忘れか、あの獅子ヶ谷精舎の夜を。わし
らは安楽房連西の美音に酔って狭い堂内を幾たびも行道
してまわった。いつかわしはそなたを背後から抱きしめ

ていた。そなたもわしに身をゆだね、そうだ。わしの手
はそなたの胸へしのび入った。丸い乳房を握りしめた。
身悶えながら、そなたはささやいたではないか。戸外へ
出ましよう。此処では、あまりのことですと」

「……」

わめきたてる住蓮の口もとを、亀菊はじっと凝視する
ばかりだった。

「戸外へ出た。月光が美しい深夜だった。木立ちの影が
寒々として、林間を奥へ進むとそなたはいよいよ強くわ
しに取りすがってきた」

この情景だけは造りごとではなかった。たしかに二人
は、あの晩林間を逍遙したのだった。ただし、一指をも
触れ合わなかった。

「……」

「そなたは草むらへ身を横たえた。わしはふるえる指先
で着衣を剥いだ。そなたはなすがままにまかせた。肌に
ふれた。寒々とした夜気はたちどころに退散し、熱湯が
ふたりの間で流れかよった。何という美(う)まし肉、妙
なるそなたのすすり泣き。一仏浄土だ。六字の番号は、
そなたの肉の奥深くで唱え続けられ、そのままわれらは

地獄の悦びの底へ転落していった」

「……」

みはった亀菊の両眼から大粒な涙が流れるのを住蓮はみとめた。

いわれなき濡れ衣を着せられた女の口惜し涙であつたか。

だが、ここで屈してはならぬ、と住蓮はおのれを叱咤した。証言の虚実は、声を大にして主張する者へ組するであろう。虚偽であっても審判者は声高な証言に耳を傾け、印象はより深く残るはずだつた。

「小松御堂の夕暮れをお忘れか。そなたは法然ご房にひと目お会いしたいと希望した。わしは案内した。あの松林を抜けていった。だが、じつはあの日御堂にご房はいらっしゃらなんだ。わしはそなたと肉慾の再会を果たすためだけに、いつわって案内したのだ。法然ご房のお人柄をまんまと利用しただけなのだ。松林のなかへそなたを押し倒した。有無を言わずに肉の饗宴をくりひろげた。ああ、そなたも負けて……」

語ってゆく住蓮の頬を熱いものがつたいはじめた。

おれは何を泣いているのだらう。

こんな屈辱を与えて、猥雑な言葉で捏造して亀菊を傷つける悲しみが、堰を切つてあふれ出したのである。

住蓮の絶叫はいよいよ高まった。

「そうなのだ。わしらは法然ご房の名声や高い人徳を利用して、そなたのような美姫を手に入れることだけを策した。六時礼讃の魔酒で酔わせ、しびれた女体を全裸にむいて獣慾を満たすことだけに生き甲斐をおぼえた。こうした不倫と、専修念仏とは全く無関係なのだ」

初めて亀菊の低音だが錆びのある声がひびいた。

「そのとおりです。おっしゃるとおりだったのです」

「……」

住蓮は沈黙しなければならなかった。

「わたしはこの人と……」

尊長僧都が言葉を添えてきた。

「たつぷり一仏浄土にひたりきつたと申すのか」

「はい……」

でも亀菊の視線はいちずに住蓮へそがれている。

この虚偽の証言、住蓮への同調は何を意味しているのだらう。

住蓮もみはった眼で女を凝視する。

なぜか、お互いの眸は濡れしよぼっていた。

「……」

「……」

純粋な愛だ、と住蓮は信じたい。亀菊はこの眸だけが語る純愛の告白を、言葉では「偽証」でつくろったのであろうか。

そう考えねば、お互いの涙は理解し得ない。

いつまでも沈黙の対峙を、二人は保ち合った。

三

「このひじりと亀菊どの身柄はわしが預かる」
弥太郎判官はそう言い捨てて立ち上がった。

「よしなに」

すでに打合わせが済んでいるものとみえ、尊長僧都はすんなりと二人を見送った。

京から送りこまれたときと同じように住蓮は、縛されたまま栗毛の背へうちまたがった。前後左右を佐々木の郎党たちが遠巻きに警固してゆく。弥太郎判官はその先頭に立った。一行は夜陰の西が岡を下った。

「授手印決答受決鈔」「釈良心記」にもこんな記述がある。

——上人(法然)門人安樂房ハ、是上人ノ弟子ニ住蓮房安樂房トイウ名僧アリ。多念ノ名僧ナリ。此ノ二人念仏声明ヲ始ム。然ルニ隠岐院(後鳥羽院)ノ時、女犯ニ依ル(北御所ノ女房ナリ)トシテ山僧ニ(尊長僧都)ニ訴エラレ死罪ニ行ハル。住蓮ハ佐々木判官密ニ之ヲ隠スル者ナリ云々

佐々木判官がいつまで隠くまったのか、その顚末は書かれていない。

馬淵の里へ一行は降りた。池のほとりをめぐってゆくとき、いつのまにか亀菊の乗馬が住蓮と馬首を並べた。

「なぜあのようなことをおっしゃったのですか」

闇のゆくてを見つめたまま咳いた。住蓮もふり向かなかった。

「あなたもなぜ口裏を合わせてくれたのですか」

「住蓮さまの気色が、余にもいちずだったので」

「ずっと昔のことです。天竺の国に一人の徳操高い王がいました」

住蓮はいきなり話題を転じた。

「はい……」

亀菊も素直に聴く姿勢になった。

「その国に災難が見舞いました。来る年も来る年も日照りが続いて国中の作物がすっかり枯れてしまったのです。民草は王城へ押し寄せました。何か食べる物を寄越せ。王城には蓄えがあるだろうと。だが王城の食べ物も底を尽こうとしていたのです。王は倉をうち開き民草たちに言いました。みんな食べてしまってもよろしい。でもその量は数日間の命を与えるしかないはずだ。あとはみんな死なねばならない」

「王さまは、それからどうしたのですか」

「唯ひとり王城を脱け出てゆきました。去りぎわに言いました。死が迫って苦しくなったら私の名を呼びなさい。私は城の外で、飢えて死んでゆくお前たちが一人残らず救いが得られるように祈り続けるであろう。そのために私は私一人だけが地獄へおちて苦しもう」

「その王さまが？」

「そうです、法蔵比丘。のちに仏の地位へのぼられて阿弥陀仏になったお方です」

「あちこちに祀られてある阿弥陀さまとは、そういうお方だったのですか」

「その阿弥陀仏の正しい教えを弘めるためにこの国へ現前されたお方が法然ご房です。お上人はそれをお弘めになる使命をになつていらっしゃる」

「……」

「だからお上人には一日でも長く生きて頂いて、一人でも多くの人間を救って頂かなければならないのです。そのためには私の一身をお捧げして」

「住蓮さま」

「何ですか」

住蓮は顔をねじ曲げた。初めて亀菊の横顔を直視した。

夜目で輪郭は定かにとらえがたかったが、蠟のように白い肌がくっきりと闇を切り裂いて住蓮の視座へ迫った。吐息がふりかかる。身を傾けて、男との距離をせばめたにちがいない。

「住蓮さまご自身が、その法然さまにかわって阿弥陀仏

の教えを弘めてもよろしいのではないでしょうか。あなたが犠牲になることはございませんわ」

ねっとりとした口説だった。住蓮は思考が麻痺しはじめるのを感じた。

「それはそうだが」

「法然さまはすでにご老体。これからはあなたのような若い人がひたむきに動きまわらなければならないのではないのでしょうか」

「私にはそんな力はない」

「ございますとも。現にわたしなぞは住蓮さまのいちずさに負けて、ありもしない嘘を思わず言ってしまったではありませんか」

亀菊の膝頭が住蓮の足にふれてきた。乗馬も身一杯近寄せたにちがいない。

「うむ……」

絶句してしまふ。

「わたしは住蓮さまのお言葉なら何でも聞きます。ゆかれるところへなら何処へでもまいります。そう決心したのです」

「ああ……」

「あのとき、あの嘘言を判官どのたちへ告白してしまった折にだってそうではありませんか。あなたがおっしゃる密通の事実を肯定することは、わたし自身が命を捨てることになるのですよ。院がそんなわたしを許しておく道理がございませんぬ」

「それはそうだ……」

足もとの黒い池面で何かが動いた。動いたものは、黒いかたまりになって住蓮たちの眼前をかすめた。

水鳥が飛び立ったのだ。人馬の接近を感じて狼狽したにちがいない。

残月の狭い光面へ水鳥はほんの一瞬、姿をさらした。それでも光度が鈍いためか、ひろげた翼が黒々と描きとられただけであった。

この美少女亀菊も、いま水鳥のように池面から飛び立って見せたのであろうか。そして、ひろげた翼はあのように黒い不吉な色だったのであろうか。

住蓮は酔いしれそうになる麻痺のなかで、わずかに踏み耐らえた。

佐々木判官の一行は山路へ分け入り、夜が白々と明けそめるころ、荒れはてた寺の境内へはいっていった。

「ここでゆっくり休んでもらおうか」

判官は住蓮を本堂へみちびいた。古い木像が奥に一つ安置されただけの無住の伽藍だった。二人の郎党が一緒に上がりこんできた。他の武者たちはどこかへ去った。あの美少女亀菊もいつのまにか姿をかき消している。

「何かあるのか」

無駄だとは思ったが立ち去ろうとする弥太郎判官に問いかけてみた。

「うむ、会ってもらいたい男がある」

「誰か」

「会えばわかる」

「それで……」

「ひと眠りするがいい。眼をさましたところでゆっくり話そう」

尊長僧都は住蓮の縛を解く、とはのめかしていた。おそらくこれから始まる会談が、赦面の条件になるのである。いったい彼らは何を要求してくるのか。また、どんな人物が現れるのであろうか。

(つづく)

村瀬 秀雄 著

|| 好評新刷 ||

『全 訳 勅修御伝』

B 6 判 法然上人 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 上人選 択集』

B 6 判 上八 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導 観經四帖疏』

B 6 判 大師 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導 六時礼讃』

B 6 判 大師 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

(仏)
(教)
(行)
(事)
(一)
(年)

正月の行事

—— 一ツ火と修正会

驚見定信
わしみじょうしん

〈暦と正月〉

新年には多くの行事がある。例えば年中行事辞典をみつけたして拵けてみれば一目瞭然であるし、また歳時記をみてもよい。春夏秋冬の四季と並んで新年で一卷がたてられている。こうした例をひくまでもなく想いつくまに指を折って数えた方が早いかもしれない。

私達の生活は種々の行事にとりまかれている。生まれてくれば名付け（お七夜）、宮参り、初節句となかなか忙しい。成長するにしたがって七五三、成人式、結婚式と続いて、そのたびに煩瑣をいとわず駆けめぐる。こうした個人の誕生から成長、死にいたるまでの行事を通過儀礼とよんでいる。これに対して正月から十二月まで、または春から冬まで定期的に行われる行事がある。季節的儀礼とよぶこともできるが、わかりやすくは年中行事

である。私達は意識するにしろ、しないにしろ通過儀礼と年中行事によってささえられてきたともいえる。

年中行事における新年Ⅱ正月の比重の高さは周知のことである。新年Ⅱ正月が諸民族にとっても「新しい年を迎える」という点で重要な折り目であることに変わりはない。しかし日本のように多くの行事が集中しているのも例が少いのではないだろうか。

正月への行事の集中はいくつかの理由があげられている。一つは古来望の日（十五日）を始りの日にしていたのに対して唐制の朔日（一日）が導入された結果、朔日正月（大正月）が望の正月（小正月）に入れかわったことである。しかし民間においては小正月も捨てがたく残されることとなった。大正月と小正月の二つの正月を使いわけながら併存させてきたといえる。

こうした重複に加えて明治五年発布、六年に実施された太陽暦への改暦がある。それまでの暦は大陰暦を中心としてきた。立春を軸としていたのである。それに対して新暦は冬至を軸としてきた。この日数のづれはほぼ四十五日である。そのため月遅れの行事がでてきた。こうした事情が正月をよりわかりにくいものにしてきたので

ある。正月行事の複雑さは日程の変化のみにあるのではない。行事の目的の違いにもある。

年中行事のほとんどは祖先祭祀と農耕儀礼を主内容としてきた。正月においても例外ではない。この両者が相まってそれぞれの行事が構成され、その全体が正月の行事なのである。

具体的にいえば正月行事の目的は先祖祭祀とともに収穫の感謝と予祝の祭りである。祭りの準備段階として身を浄め、悪霊を払う行事が必要となってくる。拔淨儀礼である。正月は祖先祭祀と農耕儀礼、そしてその準備段階である拔淨儀礼とが渾然としているところにわかりにくさがある。しかしどのような事情があったにしても古い年から新しい年への移行が最も重要なテーマであることにはかわりはない。

△一ツ火▽

新年は新しい時間の始まりである。シカゴ大学の宗教（史）学者であるエリアードは、新年を、すぎさった世俗的な時間を全面的に廃棄して、新しい聖なる時間の再生で

あると説明している。新年儀礼の筋書きは主として象徴的な破壊と創造にある。日本の年末年始の罪や穢れを払う行事もこの筋書きによっている。最も典型的な例に、火の儀礼をあげることができよう。年の火とよばれる大晦日にたかれる火をはじめ、祇園オケラ祭、十四日の左義長、とんどの火祭がある。また追儺や修正会に演じられる鬼踊りにおける松明の火も同様である。こうした行事は、それぞれ独自の伝承と意味づけが与えられている。しかし火による破壊、浄化を意図しに行事であることは共通している。これらのなかで最も典型的な仏教行事に、時宗総本山藤沢遊行寺で行われる「一ツ火」の行事がある。これは一年の罪を悔い改め、心身ともに清らかに新年を迎えるための行事であると説明されているが、それにとどまらずより象徴的な意味を示している。この行事は七百年の伝統を持ち、正式には「歳末別時念仏会」である。明治までは十二月二十四日から三十日までの七日間の修行であったが、現在では十一月十八日から二十八日までの十一日間にわたっている。この中で最も有名な行事が二十七日夜の「御滅灯儀式」である。一般には「一ツ火」として知られている。二十七日夕方六時頃

から始められた別時念仏は七時半頃に前半が終わり、番衆と、法主一心上人は一旦堂内を去る。一心上人が水浴して身を淨め再び入堂するのが八時頃である。この後半が滅灯―点火の「一ツ火」の中心的な行事となる。念仏が続けられるなかで堂内の灯りがひとつづつ箸でつまれて切られていく。念仏の声も消え最後の灯りである名号の掛軸の前にもされた「報土」の灯りが切られると同時に内陣と外陣の中間に吊された提燈ちようちんの灯りも消える。堂内は完全な暗闇につつまれる。しばらくして暗闇のなかに天井に向けて火が切られる。ついで二度目に切りだされた火は「報土」と中央の提燈の灯心につかれる。再び始められた念仏の声の中で、この火は次々とつけ木によって他のロウソクにつがれていく。こうして堂内は再び光に満たされる。新しい光が生まれたのである。儀式が終ると、参詣の人々は、「一ツ火」を移した紙燭を一担消して、持ち帰って正月用の種火とするのである。

火を消し、火を点けるという儀礼が、新しい聖なる世界の誕生を意味していることは明らかである。そして参加した人々にとっても、罪障を消滅して、浄化された人間としての再生をも意味している。つまり古い時間の破

壊、新しい時間の創造という原理は、罪障を消滅し、淨化された人間として生れかわるという考え方に重さなってくる。それはまた悪霊を追ひ払うことによつて清淨をとりもどそうとする考えにも近い。悔過と追儼が正月の仏教行事に持つ意味がここにある。

〈悔過と追儼〉

正月の代表的な仏教行事は修正会である。修正会とは「正月に修する法会の意味、年頭に当り天下泰平や帝王の安穩などを祈願するために修する法会」(浄土宗大辞典)である。バラエティがあるにしても悔過と追儼が重要な要素をなしていることも事実である。悔過とは「罪惡を懺悔する意即ち仏等の前に於て自ら身口意業の罪過を懺悔し、以て福利を得んことを求むる行事」(望月仏教大辞典)で、七世紀後半に行われたのが最初である。延喜式によれば崇福寺や嘉祥寺では定期的に行われたが、「旱災」の折には随時京畿内の諸寺院は三日間の読経悔過が義務づけられていた。悔過が個人的に行われた例は「日本霊異記」に四例みることができる。その一例は在俗の女人

が十一面觀音悔過に参加していたことである。従来の禊祓にかわる儀礼として私的なレヴェルまで受けとめられたといえよう。

悔過が正月行事として行われたのは神護景雲一年(七六七)の諸国国分寺における吉祥天悔過の法会にはじまるが、平安時代中期になると諸大寺でも行われるようになった。江戸時代の浅草寺修正会では、「除夜より正月六日に至る迄、七日の間毎夕懺あり」(東都歳事記)とある。追儼は飛鳥時代に移入され、平安時代の九世紀中頃には節分の行事として年中行事化していたが、修正会と習合したものである。修正会の民間での行事がオコナイである。五来重氏の指摘によれば仏教の民俗化の代表例ということになる。

正月は神で盆が仏の日と思いがちだが、正月に仏教の占める位置も大きい。正月と盆とは基本的には同じ構造をもっていることが指摘されている。盆が仏教的色彩を濃くするのに対して、正月は神祭りの性格が濃くなったが、実質はかわらない。オコナイにみるように仏教が民俗行事化することもあれば、民俗行事が仏教行事として再解釈されている場合もあるからである。

新年賀謹

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇—一

大正大学

電話(〇三)九一八—七三一—代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一—二二四—代表

淑徳短期大学

学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五—三—七

京都文教短期大学

学長 大橋俊有

〒611 宇治市横島町八〇

埼玉工業大学

松川文豪

淑徳高等学校長

里見達人

〒174 東京都板橋区前野町五—一四—一

鎮西学園理事長
鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺三—一—一

学校法人 芝学園
理事長

豊岡益人
学校長

徳久鐵郎

東山学園長

石井俊恭

〒606 京都市左京区永観堂町五—一

東海高等学校長

滝俊立

〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職

社会福祉法人 神守保育園理事長

神田寺(旧法禅寺・安良寺)

学校 真理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三—四—〇
電話(〇三)二五一—八六八三—五

法然上人降誕聖地

美作誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話(〇八六七)二八—二〇二

新年賀謹

鎌倉大仏殿 高德院 佐藤 密雄 佐藤 行信 〒248 鎌倉市長谷四―二―二八	愚鈍院住職 中村 真道 〒980 仙台市新寺三―一―二一七 テレホン法話(〇二二〇九九―〇九〇三)	岩手教区教化団長 圓光寺住職 加藤 順底 〒020 盛岡市南大通三―一―四九	弘経寺 金田 明進 〒302 取手市白山二―九―二八 電話(〇二九七七)二一〇二八九
〒113 東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部 仙順 電話(〇三)八一―三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口 善雄 〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺	西住院 戸川 靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤 弘道 〒328 栃木市万町二―四 電話(〇二八二)二二―〇八二二	芳泉寺 柳 楽真純 なぎら しんじゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗教学局長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)二三―四〇〇〇	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟真寺 電話(〇五三二)五二―五五六六

謹賀新年

無量山 伝通院

九品寺住職

漆間 純成

〒530 大阪府北区同心一―四―八

回向院住職

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇

九品仏浄真寺

清水 順碩

東京都世田谷区奥沢

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄心寺

小池 政雄

称名寺住職

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八―一四
電話(〇一三八)二二―一五七八

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二―二六―三八

教安寺住職

野呂 幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六―二
電話(〇四四)二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口 徳正

松庵寺内無為窟主

小川 金英

〒025 花巻市双葉町六―四
仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―一二

正覚寺住職

楠美 知行

光運寺住職

飯田 信弘

〒510 四日市市中部三―一二

謹賀新年

廣隆寺住職

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一丁目

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

浄土宗議會議員

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二一五一

お骨仏の寺 一心寺

高口恭行

〒543 大阪府天王寺区逢阪上之町一五五

電話(〇六)七七一一〇三七一(代)

摂取院住職

聖徳保育園長

金子貫達

〒850 長崎市銀座町四一五九

聖徳寺中

浄土宗議會議員

光明寺住職

山口諦存

〒673 明石市鍛冶屋町五一二〇

新善光寺住職

太田隆賢

〒064 札幌市中央区南六条西一丁目

本年一年かぎりと思いたって燃えつくす覚悟で精進、がんばりたいと思います。

——完全燃焼を信仰の歩みと受けとっています——

光心寺

北山良祐

〒425 焼津市東小川一六一一

仏教まんが

絵本「ほうねんさま」他多数発売

教育図書

大道社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

電話(〇三)二六二―五九四四

法然上人鑽仰会

新年賀謹

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

鵜飼 隆玄

稲田 稔界

祐天寺

巖谷 勝雄

藤吉 慈海

岡崎市鴨田町広元
京都市東山区林下町
大樹寺
樹昌院

大本山光明寺執事長
西念寺住職

北邨 謙順

南足柄市沼田三一五

北川 一有
長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二―一三一八

徳興山建中寺

村上 賢瑞

〒461 名古屋市中区筒井一―七―五七

雲心寺

桑山 春山

〒456 名古屋市中区尾頭町三一一九

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十九卷 正月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十七年十二月二十五日 印刷
昭和五十八年一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二二八七番

新年賀謹

總本山 知恩院 門主 藤井実応	大本山 増上寺 法主 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稲岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 一田善寿	大本山 光明寺 法主 石井真峯	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光

人生は旅。巡礼も旅。道たどれば心さやか

謹 賀 新 年

昭和五十八年 元旦

中国 33 観 音 霊 場 会

会長 小林海暢
 札所寺院住職一同



慈悲にふれる

事務局 岡山市西大寺中 3 丁目 8 - 8 ☎ (08694) 2 - 2058